備陽史探訪

第 238 号
発　行
備陽史探訪の会
福山市多治米町 5-19-7
TEL.070-1074-9617

備陽史探訪の会の目的

備後を中心とした
地域の歴史を研究し、
愛郷の精神を涵養する。

（会則第1章第2条より）

備後国衆列伝（22）

奉公衆としての三吉氏

会長　田口義之

比叡尾山城主三吉氏

慶長五（1600）年の関が原合戦まで、中世を通じて三次盆地一帯を支配した有力国衆三吉氏は、『芸藩通志』（1）などによると、十一世紀前半に活躍した権大納言藤原行成の四男兼範を祖とするという。同書によると、兼範は備後国五万三千貫を領し、子孫十五代（兼宗・兼家・信兼・秀高・光高・高家・家秀・秀明・熙秀・豊秀・豊高・致高・隆亮・広高）相続して、畠敷村（三次市）比叡尾山城に居城して、周辺を支配したという。通志は続けて、元弘年中には宮方に属し、その後足利直冬に従い、また、山名氏・大内氏に属し、十四代隆亮は所領八万石に及ぶ有力国衆に成長したという。その後、一五代広高は毛利氏に属し、居城を上里村（三次市）に移した。これが比熊山城で、現在の三次の町は比熊山城の城下町に始まるという。しかし、関が原合戦で毛利氏が防長二州に減封されると、三吉氏も所領を失い、一族離散し、備後の国衆としての地位を失ったという。

この通志の記述の内、十三代致高以降の歴史は大体事実を伝えたもので、三吉一族の活躍と、その国衆としての地位を示す一次史料も多く残されている（2）。世代を溯ると、九代秀明は、文和四（1355）年の沙彌大円譲状（3）に「三吉式部大夫秀明」と見え、通志の元となった「三次町国郡志」（4）所収の「城主三吉家系譜之写」九代秀明の官途名と一致し、系譜のこの辺りからは史実を伝えたものである可能性が出てくる。更に、この人物と推定される「三吉式部大夫」は応安七（1374）年から永和二（1376）年にかけて、東隣の山内首藤氏の地毘庄に討ち入り、要害を構えて同氏から訴えられている（5）。山内氏が守護に差し出した訴状には「三吉式部大夫入道道秀」とあり、これは城主三吉家系譜写の九代秀明の法名「実由道秀禅定門」の道秀と一致し、秀明以後は事実を伝えたものであることを裏付けている。

秀明はその後も、応永十三（1406）年頃まで生存した可能性が高く、安芸・備後の守護であった山名常熙をして「三吉入道去年の振舞、存外極まりなし」と嘆かせた

比叡尾山城跡の石垣

目次

備後国衆列伝（22）
奉公衆としての三吉氏……（会長　田口義之）1
調査報告
中世石造物の調査報告…（篠原芳秀）5
ワンショットレポート……5
研究レポート
火縄銃の威力を考える―
―距離と弾丸の威力との関係―
……（瀬良泰三）6
投稿俳句……（住田保夫）8
研究レポート
土生淵上城について……（中世史部会）9
ワンショットレポート……11
読者ノート
父木野鉱山について考える
……（杉原道彦）12
古代史部会（古墳講座）へのお誘い
……（岡田宏一郎）15
史料紹介
井上家文書（10）
御樋方御郡方村方普請場所ケ所附帳 2　16
投稿俳句……（岡田宏一郎）16
田口義之の備後の古墳30選（3）
潮崎山古墳……19
事務局日誌

現在の会員数
228名

会員数は10月上旬現在の数字です。その後の増減があるかもしれません。（いっちゃん）